店が内榮町四丁目に在る時代は、砂糖店と樟腦店との二つに分れて居つた、西川さんは樟腦店の番頭さんで、其下に我々二人居つたのであつた、此内榮町の店は天井が低くて、薄暗い空氣の流通の惡い家であつた爲に、夏になると蒸し暑いこと甚だしかつた、それで夏になると、番頭連は白地の襦袢に白せるの腰卷といふ格好で坐して執務したものだ、そしてボンサン連は御主人から賜はつた所の帷子「ジンベイ」を着用して居つた、然るに西川さんだけは何時も着物をキチント(大昔のことは知らぬけれども)着て居られ、襦袢に腰卷一つと云ふ樣な不體裁な風はせられなかつた、それで我々は如何にも行儀の良い人だと感心をして居た、尤も樟腦店へは毎日一人や二人の西洋人が來るから、多少氣兼の點があつたかも知らねど、元來がきつちりした人であつた。

苦勞を俱にせる算盤

西川さんが明治二十七年店へ奉公せられたときに、自費を以て求められた所の計算上の算盤があつた、實に此算盤こそ永年主と苦勞を俱にしたもので、西川さんの計算の的確にして決して誤りの無かつたのも、此算盤が大に與つて力ある譯で

あつた、惜むらくは此名譽ある算盤は、大正七年八月十二日、店が彼の燒打ちに遭つた際灰燼となつたとのことである、其後その話を聞き、彼れの爲めに忠魂碑でも建てゝやつては如何と笑つたことがあつた。

計算の敏速と試算表の確實なるは天下一品

西川さんの頭腦明晰にして殊に計數に明るきは周知の事である、以前は樟腦部で輸出貿易をやつて居つて、最初の程は自家製出の精製樟腦・樟腦油及薄荷腦・同油位のもので、其後魚油とか白蠟・干生薑・唐辛等の天産物迄も取扱ふやうになり、漸次發展を來し今日に及んだのである、扨當時の取引先はと云へば、僅にロンドン・ハンバーク・ニューヨークの三ヶ所であつて、怪しげなプライベートコードに依つて電信が往復せられ商賣が出來た、そして可成り忙しかつた、勿論此仕事は西川さん一人で擔任して居られ、初めの程はエキスチエンジテーブルのブツクも無しに爲替を換算し計算せられたものだが、其算出の迅速なること實に驚嘆の外なく、迚も普通の者ではあー速かには出來るもので無い、それから明治四十年の頃迄も、樟腦部に屬する一部の帳簿を受持つて居られたが、日記帳を一ヶ月位纒めて置いて元帳

に記入せられる、そして三ヶ月位一處にし、バランスを出し試算表を作られる、處が其試算が唯の一回の算盤でピタリと合算する、決して間違つた事がない、其當時配下に在りし我々は迚もそんな藝當は出來なんだ、否今日でも其眞似の出來る人は恐らく多くは無いだらう、實際天下一品と稱するも過言であるまいと思ふ、尤も日記帳から元帳に記入せらるゝ時の注意は充分であつた、記入して必ず二三度日記と元帳とを入念に照合されて居つた、當時の其面ざしが今尙ほ目に見る樣である。

店内洋服の先鞭者

明治三十七年の四月であつたと記憶する、内榮町四丁目から榮町通三丁目正金銀行前の店舗へ移轉した、今迄結界の中に坐り込んで居たものが急に椅子卓子と云ふハイカラになつた、併し洋服の着用は禁止されて居た、或日某君が以前香港へ出張員として行つて居た事があるので、洋服御持參につき着用に及びし處、お家樣よりお目玉を頂戴したと云ふ滑稽もある、其後間もなく上田貢太郎さんが入店せられ一人洋服黨が出來た、それから西川さんが新調せられ公然と着用せらるゝに至り、柳田さんが上海へ出張に付これまた洋服着用といふ順で、漸く洋服着用の氣

運に向ひ、有る者は着用して差支なしと云ふ事になり、今日では絶對洋服着用となつたのである、つまり店員として洋服の先鞭者は實に西川さん其人であつた。

正直な人故に短氣でもあつた

西川さんは實に温厚篤實の人で紳士の典型と稱すべしだ、決して約束を違へ或は人を瞞すなど云ふやうな事は微塵も無い、眞に斯樣の人を正直と云ふものだと思ふ、元來正直な人は怒りつぽいと云ふがさうであらう、西川さんも近年は老熟せられあまり腹を立てられる樣のことは無かつたが、以前はあれでなかなか氣の短い人であつた、我々も叱られたことが再々ある、樟腦工場や倉庫の人々も度々お目玉を喰ふ、商館の番頭さんなども劍もほろゝに扱はれて弱らされたこともあつたやうだ、併し御機嫌はすぐ直る、さつぱりしたものであつた、以前金子さんの秘書役は西川さんが勤められた、其時分金子さんが外から店へ歸つて來て思ひ出した樣に文藏はん鳥渡手紙を書いて呉れんかねと云つて、口傳で以て「拜呈陳者何々…」といふ風に、其れを卷紙を手にしさらさらと認められる、大概二三本續く中には書き直しも出る、短い冬の日は暮れる、砂糖店の連中は早歸つて仕舞ふので氣がいらつ

て見える、側に居る我々もお氣の毒に思ふと云つて其代理は勤まらぬ、さういふ時には吃度額に青筋が立つて居る、ぶりぶり怒つてさつさと仕舞ひ、御機嫌頗る斜で「ボンサン車呼べ……」、こんな事も折々あつた。

同情心に富んだ人

西川さんは非常に慈悲深く同情厚き人であつた、忘れもせぬ大正四年四月、大里製粉所が不幸火災に遭つた當時、僕は帳簿の整理其他の用務にて約五週間許り本店に出張して居つた(榮町三丁目)、店の二階の小さき應接室に立籠り、毎日こつこつと仕事を遣つて居た、色々心配事があるので僕は頗る弱り込んで居る、西川さんは此事情をよく御承知で、階下から二階の重役室に行かるゝ通行の途、必ず日に一二回ドアーを開き見舞はれて、そして慰めて下さる、僕は其れを非常に嬉しく且力と信頼して居た、漸く片付けて歸西せんとする一夕、特に僕の爲に晩餐會を催し慰勞の言葉を給つた、僕は此御深情を一生涯忘れることが出來ぬ。

常に激勵の辭を與へらる

西川さんは常に温情もて部下を愛せられた、不肖僕の如きも一方ならぬ恩顧を

蒙つたのである、僕が直接配下に在りしは明治三十七年から同四十年に至る四ヶ年であつた、爾來數回各地に轉勤を命ぜられたが、其都度必ず激勵の辭を與へられ益々職務に盡力すべき旨御注意があり、尚ほ僕が蒲柳の質であるからとて、健康上につき親切の御言葉を下され、實に感涙に咽んだのである、其健康に注意せよと口癖の樣に言はれたる慈父は、今や圖らずも歸らぬ旅に赴かれたのである、嗚呼。

(七) 西川文藏氏を憶ふ

北村和三郎

先輩西川氏逝きて既に半歲、顧みれば茫として夢の如し、知遇を享くること十又二年、往事逐來れば感慨無限、乃ち印象所感の一端を記して追懷の意を敍す

大正九年臘月

一篤實至誠の人　氏の一生を通じて一貫したる性格の尊さは至誠・篤實・正直公平・親切・勤勉の美德を具備せられたるに在り、爲人玲瓏玉の如しと謂ふべきか、苟も氏を知る者何人も首肯すべく、今更めて絮說を須ゐざるなり。

二頭腦明晰の人　尨大蔚然たる商店の事業の總てを巨細纒め行くことの困難なる、餘程傑出したる明晰なる頭腦と透徹せる判斷力を有する者ならでは出來ぬ業なり、記憶力の優れて强かりしこと、加ふるに計算記簿及數字觀念に卓越なりしことは、容易に他の追隨を許さざる所、若し夫れ三千店員の姓名を暗んじ、其爲人性格を併せて一々掌中に指すが如くなりし一事に至つては、天禀か抑も亦修養か讃辭の加ふべきを知らず。

三氣分の變らざる人　幾年長く交際するも變らぬ人とは蓋し氏の如きを指すか、日により時により機嫌が異ること何人にも免れざる所なれど、氏には絶えて此事無かりし、所謂天氣模樣風向を窺ふ必要なき人とて、部下に取りては何よりも仕合なりき、居常平靜、心曠意平、喜怒表はれず怡色易らざりき、げに表裏なき麗しき氣質の人なりき。

四綽々餘裕の人　奇略縱横と云ふ肌の人にあらざりしだけ、何事にも理路井然一絲紊れず、沈着從容常に綽々餘裕を存し、嘗て周章困惑の態なかりき。

五膽大細心の人　商賣上の畫策駈引には、時として放膽端睨すべからざる放

れ業を平然敢行せられたるも、而も是れ總て細心研究の結果にして、苟も放漫杜撰の跡を見ず、故に必ず驗あり、着々として豫期の成果を齎さざるなかりき、但だ日常の取引商談には、毫も駈引小細工を弄せず飽く迄赤裸々なりき、居留地商館番頭連が痛く氏を德としたる蓋し偶然に非ざる也。

六果斷決行の人　細心の弊は動もすれば果斷を缺き、兎角物事に要領を得ずハキハキせぬ憾あるものなり、獨り氏に於ては然らず、宿題懸案を殘さぬ流義にして、片端より仕事を處理して更に凝滯を見ず、眞に裁決如流の慨ありき。

七率直不飾の人　名利に淡白毀譽に超越せる、斯人の如きは世間稀に觀るへし、衒氣賣名は大の禁物にして、終始謙抑、嘗て功名を衒はず聞達を求めず、粉飾を厭ひ體裁を繕はず、御世辭など曖氣にも出されたることなし、巧言令色は最も嫌厭されたるを見る、可親不可狎の人と謂ふべし。

八温情雅量の人　愛憎偏頗の癖毫もなく、公平無私、美を擧げ長を表はし、未だ嘗て人の短所を論ぜられたるを聞かず、常に後進の爲に推挽の勞を吝まず、又義氣に富み、不尠私財を割きて友人故舊の爲に急を救はれたる實例、予の知れるのみを

以てするも猶且僂指に餘りあり、而も絶えて他人に其消息を漏されたることなし尋常人の學んで及び難き所、氏は亦物事に極めて思切よく、未練がましき處なく、誠に男らしき質の人にて、部下に仕事を任せて敢て干渉せず、唯大綱を把持するのみ偶々部下に失策あるも强ひて窮追せず、不敏予の如き一再ならず失策を爲したるも、温言規箴を加へ「商賣は儲かるものとは限りて居ませぬから仕方が有りませぬ今後甘く遣つて下さい」、春風融々誰か感激せざらん。

九公私混同なき人　公私の區別格段に嚴格にして私恩を售らず、朋党比周を愼み、因緣情實を排し、請托聽從を斥け、二十有八年間、一意專念主家の爲に鞠躬盡瘁せられたる、前に斯人無く後復た斯人なかるべし、噫。

十圓滿摯實の人　奇拔なる議論家にあらずして寧ろ不言實行の人なりき、强ひて自說を張らず、温顏以て他人の說を容れ、三千店員をして依る所を得せしむ、蓋し無爲にして化するの筆法か。

十一筆路暢達の文　筆蹟古雅掬すべく見事なりしは言はずもがな、書翰の風韻何に譬へん樣なく、時に簡潔數行餘韻盡きず、時に千言萬語立ろに成る、意達情悉

長篇一の贅語なく、更に脱字補修の跡を見ず、眞に尺牘の上乘模範とすべきもの、予筐底珍藏の幾篇、時に披覆、往時を懷うて今昔感慨久之。

十二 淫せざる骨董家　　娯樂とか遊戯とか名附くべき趣味嗜好はなかりしものゝ如し、蓋し必ずしも多趣味ならざりしならんも、多年繁劇の店務に鞅掌せられ餘暇に乏しく、何ものにも手を染められざりしものと見るを當れりとせんか、獨り古書畫特に唐宋の古書及内外南畫には趣味深く鑑賞の造詣淺からざりし、其鑑定優に一家の見識を有し素人放れの評ありき、珍藏の名品大幅數十點、世の好事家の垂涎措かざりしもの悉く收めて同氏刊行の「清風帖」に在り、大正元年夏其尤なるものを擧げて斯道商人に委して售賣せらるゝや、同人解せず怪んで問ふ者あり、笑つて曰く、凡そ骨董家は獨好がりのもの也、贋物を珍秘して得々たるもの比々皆然り試に我が所藏の眞贋聲價を江湖に問ふ亦可ならずやと、毫も愛惜執着の色なし、蓋し時流の骨董家と撰を異にする所以、亦以て氏の風格を見るへし、因に氏が朞年ならずして能く多數の逸品を蒐め得たるは、一に所謂堀出し物主義を取らざりしに在り、氏曰く、古書畫の鑑識は要するに眞贋勝負に在り、單に觀るだけにては進歩す

るものにあらず、下手な小道具屋相手にては駄目なりと、宜なり其鑑定眼の進境著しかりしことや。

十三物を粗末にせぬ人　公私を問はず品物を粗略にせざる用意の深きに感したり、用箋の書損など思もよらず、一管の筆にても穂先のちびる迄平氣にて用ゐペン先の如き毎日退店の際丁寧に拭清め幾日も幾日も之を使用せられ、古封筒を裏返してメモに代用せられたるなど、苟も些事と雖も忽かにせざる、周到の用意を見るへし、而も決して他人に對して之を強ひざる所、言ひ難き無限の味あるにあらずや、其半面に於て隨分高價の品物を惜氣なく人に頒與せられたる恬淡さ、一見甚だ矛盾の如きも、其所に氏の一流の截然たる區別あるを知るへし、贈答應酬に義理堅かりしこと、誰人も咸知悉する所ならん。

十四眞のハイカラー　邊幅を飾ることは好まれざりしが、瀟洒たる服裝、手回り調度の嗜みなど、別けて奥床しき物好みには常に敬服したりき、世人の多くは一見誰にも金の掛りたることを示したがり、兎角厭味多きものなれど、氏は飽迄地味を貴び、人眼には一寸判らざる所に案外のハイカラー振を發揮せられ居るに驚き

たり、斯人まさしく所謂英國流の紳士と評すべし。

十五 無類の愛煙家　予が氏を知りたる以前、時に禁煙を試みられたることある由なるも、爾來其無意義なるを感ぜられたるにや、多々益々辨、口附兩切さては葉卷など取り取りに喫煙せられ其量甚だ少からず、殊に輓近最も葉卷を愛用せられたるが如し、十年前迄は葉卷は餘り嗜まれず、到來品は惜氣なく悉く故上田觀水氏に頒ち其喜色を悅ばれたり、予亦近來神戸を訪ふ毎に棚引く紫煙に憧がれ葉卷の振舞を受けたり、今や復た再びすべからず、嗟。

十六 病氣せざる人　何れかと言へば蒲柳の質なりしも、不思議に頑健無病、予の如き其部下に在りたる六年半を通じて、病氣の故を以て缺勤されたるを記憶せず、蓋し節制宜しきを得たるに因らん、間食は頓とせぬ流、而も食膳に對しては健啖人を驚かすものあり、晩年胃腸を病まれたるも、日頃罹病養生に經驗なき人なれば自己の健康狀態を知るに多少見當附き兼ね、不用意の間に病勢を募らしめたるなきや、早世返す返すも痛惜すべし。

十七 宴席に於ける氏　若し下地は好きに御意とあらば、連夜にても置酒高會

を爲し得る身分地位に在りながら、進んでは酒席に顔出しされざる風なりしが、必要とあらば毫も辭まず喜んで出席されたり、輓近自ら其機會多かりしならんか、酒量大ならざるも陶然微醺を帶びて、日頃無口に似ず妓を相手に輕妙なる諧謔を弄せらる、如何に興旺するも晩くまで居殘られたることなし、某妓嘗て嘆ずらく、所詮口說いてモノにならず、せめて十二時迄引留める腕がワタシにあるならば、土藏一棟の御褒美が出るものをと、終に投匙。

(ヘ) 家庭の人、金子氏の女房役　楠瀨正一

故人の性格は稀に見る温厚且謹嚴な人であつた、而も同僚に對しては信義に厚く、部下に對しては温情熔くるが如く、眞面目にして私なく、卽ち一旦同氏に接近した者は、齊しく其德望を慕はない者の無かつたのも宜なる哉である、私は同氏の下に殆ど一日も離るゝことなく約十四年間、氏の訓練指導を受けた者の一人であるが、資性斯の如き人であつた爲に、其逸話に就ては誠に少く寧ろ無いと云つてもよ

いと思ふ、強ひて書くならば、故人は世に稀なる圓滿な家庭の主人公であつた、氏は令室を迎へられて以來二十有餘年間、尤も店務の都合もあられたが、單身にて數日に亘る旅行をされたことは前後殆ど二三回に過ぎなかつた筈である、而して此間夫人との間に二男四女を設けられたのである、氏は絶えず非常に多忙であつたが忙中趣味としては誠に高尚で、書畫骨董が唯一の樂で實に堂に入つたものであつた、店を代表しての交際上、隨分頻繁に宴會に出席された時代もあるが、必ず夜十時を期して歸宅された程家庭に對し温い人であつた、曾て或宴會の席に於て斯う云ふ事があつた、氏の親しき友人の一人が其席に侍つた仲居や藝者に懸賞を試みた卽ち西川氏を十一時迄引留めた者にはお召を一反呉れると云ふことになつた、扨宴酣になつて席上は意外に賑つた、藝者連は我こそ當日の殊勳者たらめと競うて同氏に接近した、其中例の刻限が來て十時の鐘が鳴つた、西川氏はそろそろ席を離れて歸り仕度にとりかゝられた、藝者連は此處ぞと懸命に種々引留策を講じたが失敗に終り、お召はお流れとなつた、其後此懸賞は長く有効にしてあつたが、遂に此賞を得た者が無かつた、此等は勿論氏の嚴格なる性格の然らしむる所であるが、又

一面家庭に對する趣味の多かりし人であつたことを遺憾なく證明して居る樣に思ふ。

然し同氏は決して不粹な人では無かつた、往年或運動會に參加を餘儀なくされて養老の瀧を見物し、岐阜の鵜飼に遊ばれたことがあつた、鵜飼船は多數の珍客と名妓を乘せて長良川の上流に出た、盃は揚がる、山海の珍味は處狹きまでに列べられた、宴酣に入つて一座は覆らぬばかりに賑つた、ふと西川氏を見れば、當日の淸遊餘程氣に向いたと見えて、或美妓に擁せられて熱心に「岐阜の名物……」の歌を御稽古最中である、而して瞬く間に暗踊獨吟さるるに至つた、一座の人々は同氏の此異樣の醉狂に眼を見張つたが、後宴會の席上に臨み歌を强要せらるゝ度に、終始一貫此歌を振舞はれ、遂に堂に入つて黑人も及ばぬ巧妙を見せたと云ふ、其熱心と記憶の確かなことには實に一驚を喫せざるを得ない次第である、此等はほんの逸話に過ぎないが、今爰に故人に關する記憶を新にするに及び、故人の德を慕ひ感慨無量てある。

尙左に深く同氏を知らぬ人々に其爲人と歷史の一端とを紹介する。

同氏は明治七年滋賀縣今津に呱々の聲を揚げられたが、後成人さるゝに及び、東京高等商業學校に學ばれ、明治二十七八年頃鈴木商店に入られた、其當時の鈴木商店は未だ極微々たるもので、到底今日の隆盛なる大鈴木とは比較さるべきものでは無かつた、當時同氏の學友達は、新智識者として大會社銀行、或は外國商館に或は海外渡航と、所謂新流行を逐うてハイカラ氣分を漲らせて居たに拘らず、同氏は當時の小鈴木商店の爲に一身を投じて奉公せられた、或時は早朝より起出てゝ主家の神棚の掃除迄せられた、而して陰に陽に金子氏の女房役として援助に努められた、勿論角帶前垂がけであつた、其當時校友會にて洋服を着ぬ人は同氏一人であつたとのことである、斯くして表面の金子氏と共に、あらゆる辛酸を嘗めて主家の隆盛を圖られたのであつた、遂に其結果は大里精糖所時代となり、漸く世に知らるゝに至り、續いて旭日昇天の勢を以て今日の繁榮を見るに至つた、而して同氏は去明治四十一年、世界各國數十ヶ所に支店出張所を有する神戸本店の支配人として、押しも押されもせず就任され、內部の柱石として千載不動の礎を築き上げられたのである、同氏は陰に金子氏の內助役を勤められ、主家に仕へては忠節であつた、又善

く下情に通じ、部下に對しては無理な要求なく而も嚴格であつた、而して故人の天性温厚篤實、個人としても非常に情に厚き人であつたので、能く數千の店員を心服せしめられた、卽ち長年月間一度として內部に於て同氏に對する不平の聲を聞かず、總ての人が其德を稱へたことは正しく故人の人格を語るものと謂ふべきである、誠に大商店の支配人として得難き人である。

私は茲に繰返して紹介したい、鈴木商店の今日あるは故人が金子氏を內的に援助されたことの與つて力あるを。

平生不斷の激務に當りながら不思議に克く其健康を保ち、寸隙も見せざる緊張した精力主義の同氏も、一朝病蓐の身となつて再び起ち得ず、主人を初め店員等三千有餘の祈願も空しく、大正九年五月十五日、四十七歳を一期として、終に長へに不歸の客となられた、天命とは云ひながら花の盛りに一陣の狂風、嗚呼其狂風を怨まざるを得ぬのである。

(九) 英雄の生涯

松代和四郎

大正九年五月十五日、嗚呼何たる殘酷なる日であらう、吾が最大の恩人吾が唯一の指導者西川文藏兄突として逝き給ふ、事極めて急、病勢は急轉直下、僅か十數時間にして事終に終る、生時に二階の一室に在りて書を繙く、電話ありて電話口に至れば、圖らざりき其所に思はざる聲あらんとは「只今西川樣が死なれました」、吾れと吾が耳を信せず、又問ひ返せば「鈴木商店の西川樣が、ほんとですよ—」と云ふ、驚きの叫と共に少時吾れと吾が身を信ぜず、只茫然として夢に夢見る如く、空しく蒼穹を仰ぎて長大息せしのみ、嗚呼其時の聲、驚きの叫、失望の色、今も猶新たなり。

故人の生前二週間前、書を送りて生か老母の死を悼み給ひて、人生朝露の如しと歎じ給ひたるに、誰か思はん今旬餘ならずして、朝露よりも果敢なき此人生の悲慘事に會せんとは。

惟ふに故人は偉大なる手腕の人なりき、夙に頭腦明晰を以て知られ、殊に數理に

長じ、其初めて笈を八幡商業に負ふや、數學に於ては常に遙に同輩を拔んでたりと次で東京高商に學ぶに及びても、此點に於て敢て他の追隨を許さゞるものありしと、さればよく不斷の膨脹を爲して止まざる、鈴木商店の店務を處理して十年一日の如く、嘗て些の遺漏なく、金子柳田の兩氏をして後顧の憂なく、縱横に其手腕を振はしめたる頭腦手腕に至りては實に驚くべきものありしと、故人は所謂安んじて六尺の孤を託すべきの士なりし也。

故人は手腕の士なりしと同時に、又偉大なる人格の所有者なりき、故人と其半生の苦樂を共にしたる金子氏をして「君は實に立派なるゼントルマンなりき」と叫ばしめたるも宜なる哉、故人は徹頭徹尾人間として完全なる人なりき、決して人間味を脫したる天才的の人にはあらず、されば其行動の何れの點を取るも、不常識の點なく模範として學ぶべきもの多し、故人は又長上に對しては謙、下を遇するに厚く德望一店を風靡したり、昨今自他融合論とか唱へらるゝもの、我が心を人の心に融合し、我れなく人なく公平無私の立場になる、此れ所謂温情主義の理想なりと、然らば故人は正に自他融合の士、徹底したる温情主義の人なりき、故人人の失敗の苦痛

に悲しむを聞くや、常に我心を其人の立場に置き、恰も我事の如く誠意ある同情を寄せたり、されば一たび君の此同情に浴したる者は、終生永く君の德を慕ひ、桃李語らずして下自ら逕を成すに至れりと云ふ。

故人は又手腕人格の士なりしと同時に、高尚なる趣味の人なりき、世間數理に長ずるの士は往々にして文筆の才に缺くる所あり、然るに故人は然らず、幼少より文を能くし雄筆を振ひ、友人知己をして常に嘆賞せしめたり、森支配人の弔詞に曰く「君文を能くし行文流暢意思徹底、殊に其書翰文に至りては天下一品の稱あり」と、眞に其然るを見る、書畫骨董に對する故人の趣味は世間周知の事にして多くを言はず、今や珍品財寶空しく藏せられて其主なきを悲しまざるを得ざるなり。

故人は常に讀書を好み、殊に幸田露伴の作物は幼少より最も愛する所なりき、其他古今東西の書を渉獵し、歸宅常に午後八時を過ぐるも、餘暇あれば書を手にして倦む所を知らざりしが、一朝病床の人となられし後も徒らに惰眠を貪らず、新著を註文し死に至る迄讀書を廢せざりき。

故人は又高潔淸廉の聞え高く、夙に物質界を遠ざかり精神界に進まんとする意

ありしと云ふ、殊に自然の美を愛し竹を好み、其庭園竹多くして綠竹淸々居と稱し且自ら脩竹と號せり。

聞く故人は靜養中にも、春光麗かなる日、庭前弱き日光を浴びつゝ、隣家より舞來る數片の櫻花に對し、恍惚として我を忘れ給ひしこと屢々なりきと、嗚呼天は故人の手腕人格を閑地に置くを許さず、故人は絕えざる義務の囁きに促され、死に至る迄嘗て我苦痛を人に訴へたることなく忠信なりしなり、昔賴山陽は最後の一刻迄も大日本政記の筆を擱かず、孔明は其死期の愈々近づくを知るや、出師の表に永遠の生を傳へて逝き、又彼の那翁の大陸政策をして畫餅に歸せしめたる英吉利の宰相ウイリヤムピットは、死期迫るや聲微かに、"England with all the fault I love thee still"の言と共に英魂長へに去れりと傳へらる、故人の死は正に是等の諸雄と比肩するに恥ぢずと謂ふべき哉。

嗚呼故人の生涯は人生最高貴の戰に於て、戰半にして壯烈なる最後を遂げたる英雄の生涯なり、ソクラテス曰く、"It is not mere life but a good life that we court"と實にも蜉蝣の如き人生、我れ人共に一度は死すべき身なれば、故人の死や惜むべく

羨むべし、榮譽ある英雄の生涯、光輝ある戰士の最後、故人の死や惜むべく羨むべし筆を擱き故人の寫眞に額つき物言へども答なく、雨聲蕭々として暗夜悲し。

(一〇) 噫西川文藏君

落合牛太郎

突如君の訃に接せし其時の驚愕は高調に達し、茫然自失せしも理りにして、病床に親まれたることさへ知らざりしのみならず、君は先天的に蒲柳の質に非ずして寧ろ健かなる體格を有せられしを以て、此の如き事は想像だに及ぶべくもあらざりしなり、人命の果敢なきは朝露に譬へたりと雖、意外も亦甚しく、素より手當は周到にして遺漏あらざりしは勿論なるべければ、病症の如何に猛烈なりしかを知るべしと雖、周圍をして何等の覺悟をも與へざらしめたるは長恨たらざるべからず。

噫君は、最愛なる夫人や可憐なる幼兒や大なる事業を振り捨て、數萬の哀惜の涙に送られて、眞に逝かれたるなり。

遺されたる御家庭や御一族の、無限の悲痛を想へば、感慨の餘り身は慄き、轉た同

情の涙に咽ばざるを得ず、哀愁に陷りたる余は、玄關に弔意を述ぶべく姿勢を正したる儘、萬感胸に迫りて口は自由を失ひ、唯默禮を重ねて退きたり。

過ぎし二十四年の間、薫陶と厚遇を與へられたる懷しき君に、再び見ゆるを得ざるに至しりこと、思へば斷腸の感に禁へず、せめて永年の謝意を捧ぐべく、今一度見えんことを欲するの情切なるに、機會を逸せしは千秋の恨事なり。

君は恬澹なる天賦の性を以て、内外を問はず人に接する甚だ慇懃にして、聊かも傲る色なく、總てに好感を與へられたり、又君は陰德の君子にして人の情を察する深甚、數多の部下に對しても全く家庭的にして、專ら愛を以て遇せられたる夙に定評あり、殊に其品行に至りては些の瑕瑾もなく、頭腦明晰、精力絶倫にして、勤儉の德に富まれ、崇高の性格は容姿にも表はれ居たり。

合名會社鈴木商店をして今日あらしめたる、總理其人の聰明に因れるは論なきも、恰も家庭に於ける良妻賢母の如く、君の常に總理を助け、雄大なる謀議に參與し以て堅固の基礎を築ける結果なるべく、部下を見る子の如く、愛と德とにより指導せられたることは、部下の總てが如何に忠實に、如何に結束的たるかを見ても窺は

れ得るなり。

君は既に逝けるも、不滅の靈は永遠に實在して其の事業を扶け、君の生ける教訓と崇高の權威とは、日月と共に輝くべきを疑はざるなり。

(三) 今津時代の西川氏

玉木新造

私は西川氏と同鄕であるが、年輩よりせば私が一日のの兄であるから、氏の幼年時代の友達ではありませぬ、けれども氏に就て鮮かに記憶に存する二三の事があります、西川家は氏の御祖父樣の時に分家せられたのですが、初代の人は誠に勤勉で且節儉家で、實に一家を興すに適當なる人でありました、又二代目の御父さんなる人は、御承知の通り是れ亦質素勤勉で律義一遍の人であり、御母さんも實にあの通りの賢婦人である、是等の人々を背景とし之に近代的の陶冶を加へた人を想見すると、凡そ氏の爲人を知ることが出來るのであります。

小學校にては、氏の級はたしか全體で二十人を成さなかつたかと思ふ、其中に何

時も成績優良で目立つた生徒が二人ありました、一人は氏で、今一人は今も今津にて書肆を營んで居る池本字之助氏であります、此二人は年々進級毎に、小學生には無上の榮譽である特別褒賞を貰はないことは無かつた、其れ故十餘人の生徒が年毎に減少して行つたにも拘らず、二人は最後まで續けて全科を卒業したのであります、確か明治十八年の七月であつたかと思ふ、滋賀縣には町村制を施行して聯合村役場が出來たので、此優等卒業生二人は間も無く役場へ出て仕事を手傳ふことになつた、其頃西川家は町第一の富豪であつたが、役場員になれば頗る名譽とされたのである、最初聯合戸長は官選で、私が擧げられて月給拾八圓、是れが全郡戸長中の最高級であつたが、今日より顧れば誠に笑止である、次で書記が五圓、給仕格の西川、池本は貳圓五拾錢の月給であつた、此役場勤務の數月の間に、私は一層善く氏の爲人を知ることが出來ました、一言にして云へば、氏は實に何等の癖のない温順な性質であつて、一面又誠に慧敏であつた、其れ故誰れしも西川家の兄弟の中でも此人は將來必ず出世をするであらうと思はぬ者は無かつた、此役場生活もほんの暫くの間で、次で大津の商業學校へ入學されたのである、此以後の事に就ては私は間

接の知識しか有しませぬ。

要するに、氏の今津時代に就ては、別段に取立てゝ言ふべき變つた事はありませぬが、只善良なる一箇の少年であつたと申せば、其れが全部を盡して居ります、誠に純白な良質の白紙でありました、此れに如何なる妙畫が描かれるかは後年の事に屬して居つて、而して其成果は私の幼年時代に既に期待して居つた所を少しも裏切らなかつたので有ります。

(三) 二十年振上京された時

建部清四郎

元來古今の偉人とか英雄とか稱へらるゝ人には奇行逸事が多く、隨つて其れ等を中心にした劇的な物語が可なり澤山あるものでありますが、彼の北米十三州の獨立軍を率ゐた主將であり、亞米利加合衆國の最初の大統領となつて非常な偉業を爲し遂げたワシントン其人には、傳へられた逸話が甚だ少く、「彼が幼少の時父の秘藏の櫻の樹を切つて其れを正直に白狀した」話は、小學校の修身書の材料ともな

つて居りますが、此れは恐らくワシントンに就いて傳へられたる唯一の逸話であらうと言ふことを或書物で見ました、故西川氏も之に髣髴した面影がある樣に思ひます、或は隱れた逸話なども相當にあつたかも知れませぬが、併し其れは高潔眞摯な人格美に覆はれて終つて居るのではありますまいか、一言で申せば人格の人でありました、徹頭徹尾正義の人でありました、公明正義を經とし、熱誠・忍耐・精力を緯とし、其人格を各方面に發揮して孜々黽勉、他の模範となり德望の的となり了せられた樣に思ひます、さて故人の爲人とか功績とかに就ては、今更呶々する迄もなく餘りに周知の事でありますから、私は故人が東都を去られて二十年、而も一生涯を通じて唯の一回、東京見物？に出られた時の印象とでも申すべき事柄二三を書いて見たいと思ひます。

時は大正元年の正月二日、筑波颪の肌寒い朝でありました、私は新橋プラットホームにトランクを携へられた故人を迎へました、驛の帳場で腕車を傭ひ、故人は車で私は電車で、旅館島平へと出掛けようとします處へ、窪田駒吉氏が當時東京でもまだ珍らしい物の一つであつた自働車で以て迎へに見えましたので、私は新橋端

まで駈け付けて故人の車を呼び止め、私がトランクと共に車に乗り、故人は自動車に移乘されて、再び出掛けることになりました、私が車に乘る時に車賃として五十錢銀貨一つを渡されました、旅館に着いて車賃を聞くと三十錢と申しますから、御正月の事でもあり御祝儀の意味で五十錢を與へ、故人の座敷に通つて一別以來の挨拶を濟しますと、「今の御剩りは？」と聞かれましてはつとしましたが、隱すことでもありませぬから今の事實を述べますと、「そうか、まあよい」とお話を他に移されました、常に旗亭などへの送迎の車夫などには、缺かさず祝儀を遣さるゝ例の樣に聞いて居りましたから察するに、「柄にない冗費を省け」の意味で、分相應の教訓である と解釋して冷汗を覺えました、其の日誰かの晝餐招待宴がありまして、深川亭へお相伴致しました、悠々たる隅田の流れの外邊りの樣子は、隨分變つて居つたのでありませう、何分二十年振りの事ですから、暫し飽かず眺めて居られました、其れから輕妙なる諧謔と共に、欣然として杯を重ねて居られましたが、私も一つ敬意を表し一盞を献じましたが、待てど暮らせど更に御返盃がありませぬ、變だなあと思つて能く考へて見ますと、場所が場所でもあり、「若いうちは酒を慎みなさい」の無言の教

訓が籠つて居るわいと感付きまして、却つて恐縮しました、斯の如く故人の言行には、如何に些細なるものにも機會を捕へて教訓指導を與へられ、冷汗三斗の思をしたことも少くはありませぬでした。

其晩は何人かの招待によつて帝劇の見物に行かれました、どんな狂言であつたか、又演劇に就てどう云ふ興味と意見を持つて居られたか能く存じませぬが、「帝劇内部は成程立派だ、全くお佛壇の樣だ」と、お世辭もありませうが頻りに感心して居られたこともありました。

翌三日早朝には晴降町の荒木氏を訪問せられました、同家は故人が一つ橋時代に假寓して居られたお宅で、爾來年々義理堅く初松茸など贈つて居られたさうてあります、可成り狹苦しい宅でありました、先方でも錦衣歸鄉とも謂ふべき此珍客に接し非常に喜ばれまして、手を取らん計りの歡待、故人亦慈母に再會した時の樣な御滿足にて、涙ぐましい程頗る感傷的な「シーン」でありました、先づ二階にと通られました、六疊敷位の餘りサツパリもしない部屋でありましたが、併し此れが螢雪の功を積んだ思出の多い處だなあと言ふ面差にていと懷しげに邊りを見廻され

ふと小窓から横小路の湯屋や「しるこや」などを見付けられ「此所だけは二十年前と少しも變つてない、此變化の多い帝都の眞中に全く奇蹟だ」と、暫し感慨無量の體に見受けました、お話は其れから其れへと容易に盡きさうにも見えませぬ、其れはそうでありませう、二昔前からのお話ですから、軈てお約束の時間と見えて、窪田氏が自動車を廻されましたので、名殘りは盡きぬが再訪を約されて、市中一巡にと出掛けられました、晝餐は赤阪三河家でありました、其れから再び自動車を駈けさして夕方高輪窪田氏邸を訪はれ、品川灣の風光を賞しながら菓茶の饗應を受けられ、其れから當時箱崎に新宅を構へられた本庄利三郎氏を訪問せられました。

「二三日御馳走攻めじやからあつさりと」晩餐を濟まされ、四方山の話についい時を過し、お約束の落語寄席への御案内もおぢやんになりました、深更に及び雪がちらつく中を徒歩で、西河岸なる旅館へお送りしました。

四日は凡ての招待を斷り、再び荒木氏を訪はれ、更に懷舊談に花が咲いたさうでありますそうして其晩、夜行で歸神された樣に記憶します、僅か三日間の御滯在でありましたが、如何に思出の多い御旅行でありましたでせう、恐らく之が一生涯を

通じての唯一の私的御旅行であつたでありませう、其反面に於て、故人が平常如何に精勵恪勤寸暇だに持たれなかつた事を、最も有力に物語つて居るのでありませう。

(三) 故人の面影　氏家幾太郎

野生はもと久しく鈴木商店に勤務し、直接西川支配人の麾下に在りて、事に觸れ故人の薫陶を受けし一人なるが、茲に感想の一二を記して氏の崇高偉大なる人格を偲ばむとす。

餘裕の人、趣味の人

凡そ世間知名の實業家、事業家と云はるゝ人の中にも、所謂純資本家階級のものにて、資力を以て他人に事業の經營を委し、自ら手を下さず利得に依つて大を爲す人士には、趣味廣汎にして技能に於ても卓絶せる者少からず、然るに故人の如き、膨大なる鈴木商店の支配人として内外多端の事務を掌り、大世帶を切盛りして日も

猶ほ足らざる地位に在りながら尚且平生餘裕綽々たりしことは、偉人物と謂はざるべからず、卽ち故人が書畫骨董に一眼識を有せしは世間周知のことにして、古今大家の作を識別して誤らざる、實に斯界の專門家を驚かすこと屢々なりき、此神秘的技能の所有者なりしことは、故人が平生餘裕ある偉人物なりし一例なり、又故人は書を能くせしが、其人格の崇高なる自ら書中に現はれ愉快を感じたること屢々なり。

人格の人、統帥の器

故人は平生店務に嚴格なると共に、部下に接するに温情を以てせり、所謂思ひやりの人にして、部下の私事に於ても、其幸不幸に對し恰も自家の出來事の如く同情せらるゝ温情は、軈て雲の如き俊才が氏の命令の下に手足の如く動く所以なるべく、若き店員が公私共に故人に私淑し居たりしことは實に稀に見る美風なりき、故人は又淸廉の人にして、公私の區別嚴格なりき、故人の人格に私淑して働きつゝありし店員は實に鈴木商店の寶にして、同店が益々大を加へつゝあるは、故人統率下の人士が其感化を受け、私事を離れて今も尚ほ活動しつゝあるが爲に外ならず、野

生久しく故人の感化を受け其高恩に感じ居たりしが、先年生家整理の爲に、又一は野生個人の力が將來那邊迄記錄され得るやを計量すべく、好奇心に驅られ申譯なきことながら、心ならずも先年鈴木商店を辭して世間の荒波に乘出したり、別れに臨み敎へられたる事及故人の溫情は恰も慈母の如く、故人の面影は今尙ほ眼前に髣髴として永久に忘るゝ能はず、爾來故人の感化を益々練磨發揚し來りしことは野生に取り誠に幸福とする所なり。

西川氏は既に逝きて故人となり、鈴木商店の損失や蓋し大なり、然れども故人が店を思ふ精神と部下に植ゑたる美風は、永久に復活して店運隆盛を致すべきを疑はざるなり、茲に感想の一端を敍し、以て故人の英靈を慰むと云爾。

(四) 故人を偲ぶ

西岡貞太郎

凡そ人を感化するに於て人格の力より優るものはなし、人を指導するに於て躬行の力より優るものはなし、人を任用するに於て公平の力より優るものはなし、故

西川文藏君は二十有六年間我鈴木商店に仕へ、長く支配人の重位に在りき、君天資温厚品性高潔にして名利を求めず、其欲する所は商店の隆昌に在りて毫も私慾の念なし、是を以て衆心歸服し其高風を仰慕せり、君の店務に鞅掌せらるゝや、如何に繁劇の際と雖も、今日の仕事は必ず今日に始末して之を明日に殘さず、書類器具の如きは一々所定の處に整頓し、何時にても應急措辨するを得べし、是を以て範を部下に垂れ店務爲に振肅せり、君の人に對するや温情に富み、公平無私を以て唯一の信條とし毫も私心を挾まず、是を以て部下皆心服し喜んで之が用を爲せり、余は年齒遙に君より長じたるも、我商店に奉公を始めたるは君より遲かりき、余が君と相知りしは明治三十年にして、爾來親しく其人と爲りと其行ふ所とを見て君に學ぶべきもの多々あるを感知せり、如上の三點は蓋し君の特長の主なるものと謂ふべし、余の我商店の一要部に備はり、十數年間幸に大過なく以て今日に及べるもの、亦君の感化に賴るもの多きを信ず、聞く君の桑梓の地は江州高嶋郡今津町なりと、君の温醇玲瓏玉の如き資質は、其れ或は中江藤樹先生に私淑して然るか、或は琵琶湖邊自然の風光に同化して然るか、今や温乎たる其風姿は見るべからざるも、高潔な

る其品性は深く余の腦裡に浸潤して離れざるものあり、茲に故人の行狀逸事等編纂の擧あるに際し、聊か所感を述べて欽慕の微意を表す。

(一五) 故人の懇到なりし一例

日向利兵衛

西川君は淡々とした性質のお方で、誰に厚い誰に薄いと云ふ樣な事がなく、何年御交際を願つても調子の變らぬことは、今考へても奥ゆかしい感じが致します、私が故人を追懷する一つの逸事は、或時、君に少し許りのお金を託して、私の爲に平生用の掛物を二三幅買つて下さる樣お賴みした時のことであります、これは君が書畫の鑑賞に堪能なのでお賴みしたので、固より少しのお金ですから立派なものが有らう筈はありませぬ、唯何でも宜しいと申したのです、君は早速お出入の商人を呼ばれて、三本の幅をお屆け下さいました、一本は書幅で天山と云ふ人の書、他の二本は文鳳と桂翁と云ふ人の畫でして、三人とも私の樣な素人には初めて聞く名です、皆さんの多數も私と同樣初めてお聞きになる名前と存じます、これは僅かばか

りのお金のところへ、君のこと故贋物は全然排斥せらるゝので、從つて眞物となると勢ひ、吾々初心の者には分つて居ない作家のものとなるは已むを得ないことです、所で君は斯かる無名の人々のものでは、私に取りて興味のないものと思はれたか、右の幅に一々其作家の本名、生國、經歷、流派等委しく説明を書き附けて下さいまして、私は此等無名の人々の書畫に興味を覺ゆる樣になりました、多忙なる君のことですから、一々こんなことをお調べになる暇もなければ、多分書畫家の人名辭書樣の書物からお書拔き下さつたのでせうが、多忙の間にも其作家の説明を幅に副へて、保存の出來る樣に書拔いて下さつた御懇切は、實に難有思ふのです、これが普通の人なら「書畫家の人名辭書を見たまへ」とか精々其書物を突付けて見せて呉れる位が關の山ですのに、君の此懇切さは何と奥床しいことでせう、何でも無いことの樣ですが、こんな些細なことにも君の性格の片鱗が現れるので、何時でも此等の掛物を見る度に、君の懇到なりしことを追懷して、大したものでないものも私に取りては家寶の樣な氣が致します。

(六) 四十一二年の事柄

松島久之助

西川様にお目に懸つたのは私が入店しました四十年の十二月、其御挨拶を申しましたのが初めてゞしたが其前から自分の兄等も店にお世話になつてゐる關係上、可成り店の風など聞及んで居りました爲に、當時西川様だけが周圍の方と餘りに懸け離れた、久しく洋服の本場にでも行つて居られた方の樣に、着こなしと云ひ態度と云ひ、上品に垢拔けのした、俗に云ふ英國の紳士スタイルとはこんな姿を云ふのだらうと印象せられたことが、今でも私の頭に殘つて居ります。

其れから三ヶ月許りして、私は砂糖部から樟腦部に轉勤することゝなつて、初めて親しく西川様の謦咳に接することが出來ました。

御承知の通り其時分店は榮町三丁目で、表通りに面した砂糖部には十人餘りも居て、其れはなかなか賑かな仕事振でしたが、奥の方の樟腦部には西川様の机の前に楠瀨君が一人、其れも會計の人と大きな一つの机に向ひ合うて居たのみでした

名前は樟腦部でも、樟腦の外に薄荷・魚油・寒天・木臘・生姜等の輸出向天産物は總て此部で取扱うて居りましたから、他の店の十人前位の仕事をば、お二人で立派に處理して居られました。

樟腦部には私の後間もなく又一人加はりましたが、此一つの机が其後久しく自分達四人の共有物でした、こんな具合ですから自然に全體が親しみ易く其仕事は一團となつて皆が精出して愉快に執務すると云ふ實際の有樣でしたから、入店して間もない自分達も、仕事の上では密接に西川樣のお世話になりました。

西川樣が支配人になられた頃の御多忙さはまた一入で、とても今日想像の出來兼ねる程でしたが、其お忙しい中にも、時々骨董屋等が書畫を持參してはお勸めしたり、又は鑑定をお願したりした場合などには、重みのあるあのお口から輕い諧謔なども交はり出て、よく一座の人々を心から笑はせられ、忙中の閑話に店内俄に清雅の氣に滿々たる思が致しました。

親しくして居りました杉君が西川樣のお話だと云つて、西川樣はお若い時分に將來書道で身を立てる考を持たれて一生懸命習字をせられたさうだと云ふ樣な

ことを私に話したのを憶ひ出すと、西川様のお體には尚さうした藝術的の血が通つて居た様に思はれます程、書畫に對する御趣味と御鑑定眼は亦格別と伺はれました、尚御趣味の點では煙草と茶を非常に嗜まれた様でした。

お正月にお宅へお伺ひした折などお座敷を拜見しましたが、萬事其御趣味から割出された、所謂茶人味とでも申す様な澁味のある國粹的の上品さと、現代に順應した新しさ華やかさを交へた歐洲の貴族趣味とを善く調和した裝飾をされて、羨しい御住居でありました、恁うした美しい暖かな御家庭の團欒と御趣味とで、日常の繁勞を慰められ、不斷の奮勵を續けられたことゝ、泌々感じるのであります。

約三ケ年間、西川様の下で働かして戴いた私は、非常に幸福者でした、彼の淸楚たる裝ひに絶えず微笑を浮べられた温顏や、どの人にも萬事思ひ遣りのある親切さや、嘗て他人の惡口等を口にされたことの無い高潔な心情や、御自分には嚴正で人には寛大な、而も人によつて聊かも厚薄の無い公平な態度など、近づく人が皆知らず識らず正しい方良い方にと感化せられたのは、誰しも感じたことだらうと存じます。

又私共に、お讀みになつた書物を其人其人に適する樣撰擇して御分配下さるなど、絶えず部下の修養に配慮せられた細心な御厚志に對して、今更當時に於ける自分の不慮不省を責めることであります。

御身體もさうお丈夫と云ふ方ではなかつた樣ですが、其れにも拘らず、あの劇務を規則正しく處理して、一日も缺勤されなかつたのは、如何に仕事に熱心であり、又攝生に深く心を留められたことかと恐察して居ります。

其内に店運も益々隆盛になつて參り、大學出身や高商出身の人々も多勢入店することになつて、店風も自ら變遷して行くにつけ、店も取擴げや模樣替で、度々大工仕事をする騷々しさと不潔不便の中で、皆が多忙な事務を執りましたが、若い連中が不衞生などと不平がましいことを話合ふのに、あの奇麗好きな御性分で、其態度にさへ其樣な色もなく、忍んで執務して居られたのは、なかなか出來難いことゝ思ひます。

又其時代には、よく若手の連中から、寄宿舍の問題やら運動の設備やら食事のことなど種々申出た場合、いつも若い人に同情を持たれて、漸次滿足を與へられまし

た。

日本商業會社が新設せられ、私は其方に轉任しましたが、前に申した通りの時代でしたから、西川樣の下で約三年毎日々々親しく其御指導を受けました、そして西川樣の帳簿記入のことから、外國爲換率で換算せらるゝ計算の御熟練振や、商業上の通信などの卓絶した御拔量などを拜見して、拔群の御手腕に心から敬服して居りました、そして私は今、當時私の書いた輸出書類で、西川樣より支配人としての最初のサインを戴いたものが、尙ほ外國の何處かに保管されてあるだらうと思出して、一種の誇りを感じます。

其後永い間西川樣の足下を離れて居りましたが、私は恩師慈父に對する眞情を以て、蔭ながら常に御健康を祈りました、店の人事通知で、始めて西川樣が御病氣で而も可成り御重態だと云ふことを知りました時には、正に靑天の霹靂の如く驚いた次第でありました、其れから間もなく、精しい御容態を御發表になり、又各方面の人の話にも日ならず御全快の模樣と聞きましたから、皆々心から喜び合ひ其日を待つて居りましたが、今となつては其れも夢、總ては終りました。

併し御臨終に侍することの出來なかつた私は、此悲しい事實を今尙ほ夢として
そして金子樣の御弔辭にありました樣に、西川樣は鈴木商店の在る限り永久に生
きて居られることを確信して聊か慰めて居ります。

今此思出を書きますにつけても、私の頭に在るあの「偉大な御人格」を、拙い筆に盡
すことは到底不可能だと思ひます、只恰も彼の芙蓉峰が、古往今來、詩人や畫家に依
つて表示することの出來ない、或偉大さを持つてゐると同樣に、西川樣其人に接し
た者のみが、其光輝ある御人格を直感するより外ないことゝ存じます。

以上書き綴りましたが、書けば書くほど、頭に在る「面影」から遠ざかつて行く樣に
思はれます、只此小文が芙蓉峰の一個の小石一本の雜草ともなれば、私の望は足り
るのであります。

(二七) 鰹節の樣な人　妹尾清助

其時が自分と西川氏とが親しく言辭を交した最後の時で、今では悲しい思出の

種とならうとは……。

其れは四月二日の夜であつた、自分は南北滿洲の視察旅行を終へて、報告旁々氏を病床に見舞うた、十餘日も惱みに臥して居られた人とも思へぬ程頗る元氣で、氏は例の嚴格なる氣風とて端然床の上に坐して對談せられた、何れ近々の內には床拂ひもして出勤するからとの事だから、餘り長居して病體には如何やと氣遣ひ倉皇として辭した、其後秘書の岡君には時々容體を伺うたが、經過も段々と良く最早出勤せらるゝに間もあるまいとのことで、半ば安神もし且は屢次病室にお邪魔するのも反つて御迷惑との遠慮が仇となり、永劫氏の溫容に接することの出來ぬ樣になつたのは、自分として實に遺憾の極である。

森支配人より、何か故人に係る逸話美談あらば錄して不朽に傳へ、せめてもの手向けとせむ御企のあることを聞き、自分も何か故人の逸話をと思へど、自分は永い年月鈴木商店にて故人を先輩と仰いで仕へたものゝ、入店當時より部が違ひ又本店勤務も三年そこそこにて、新潟に大阪、沖繩に或は淸水にといふ風に、殆ど萍の如く諸方を輾轉し、大正八年十四年振に本店勤務となつたので、比較的故人の事に就

きては多くを知らぬ、併し故人の逸話は事悉く美談ならざるはなく、氏が擧手投足總ての行動は、内に在りては後進の師表となり、出てゝは凡俗の範となるのであつた、彼の地位で敢て名利に走らず、恬淡にして職に精勵、人に寛にして己には最も嚴人と約したら堅く守つて違へず、若しも氏に讃詞を呈するならば、總ての形容詞を羅列するも言ひ盡せぬであらう。

只自分は氏に對しての始めての印象と、其後氏に依りて受けたる感化にて、生來粗野奔放の自分が自然と一變した事を、古い記憶を手繰り涙に筆を呵して手向の記としやう。

明治三十六年夏の眞盛り頃、或る知人の紹介で鈴木商店に入店の運びとなつた兩重役の口頭試驗にも稍々及第したらしく、兎も角來て見るがよからうとの事で先づお家樣にも挨拶を濟ました、其頃内榮町の店は、東が樟腦店西が砂糖店と云ふ風に區界が付いて居て、西川氏は其東店の樟腦店の方に二三の人と事務を執つて居られた、自分は入店の挨拶をしたが、何となく嚴格な樣なぶつきら棒で無愛想の人……是れが始めて受けた西川氏の印象であつた、翌日から新參者として砂糖

店で見習ふことになり、こんな樣子で西川氏とは多く接する機會もなく、從つて口も利くことは殆ど稀で、只始めて受けた印象が何處迄も腦裡に喰付いて、寄付き惡い親しみ難い感じを持つて居たが、是れが彼是一年足らず續いて、三十七年の四月一日に、店は榮町本通に移轉した、內榮町とは異つて古風ながらも洋館であり、內部もぶつ通しで、西川氏とは終日顏をも合せ、又時に觸れて一言二言言辭も交せば又雜談も聞く樣になつて、初めの印象が裏切られたことを發見した、丁度其時分から西川氏は鰹節の樣な人で、初めは無味淡泊でも、煮れば煮る程嚼めば嚼む程段々味の美なることを感じたのであつた、此感じは自分の眞に僞らざる告白であるから茲に遲蒔ながら、縱令一時でも氏を斯樣に誤解したことを故人に陳謝する、定めし地下で馬鹿な奴と笑はるゝことであらう。

今一つは氏は、言うた事は何處迄も堅く守り、如何なる瑣事と雖も物事を苟もせずといふ、其處に故人の人格が窺はれる、其れが自分に係る事で、又自分も其れに依り偉大なる敎化を得たのである、西川氏は人の知る如く書畫骨董に多大なる趣味を持たれ、又一面讀書家で、萬事に造詣淺からざる人であつた、で少しにても時間に

餘裕あれば、雜誌に新聞に新刊物に目を曝されたものである、榮町時代には、氏は常に晝食を自宅で取られ、往復共に車を用ひられた、其頃氏は東京の萬朝報、讀賣新聞を愛讀せられて居た、丁度氏が晝餐時に自宅に歸らるれば、其新聞が配達せられて居る時刻で、食後概讀した上車上にて又新聞に目を通されて居た、當時萬朝報には茅原華山、倉辻白蛇、松井柏軒等の連中が政治に風敎に、又讀賣には、例の河上肇氏が文藝欄を賑はして、他愛主義無我主義と、なかなか旺んに氣を吐いて居た頃であつた、自分は東京新聞が讀みたくも、其時の自分としてはさう總てを購讀する程の餘裕も無かつたので、或日氏に向つて、讀古しで結構だから借讀したいと懇望した處快諾の下に其日から、而も御自分が未だ充分讀了せられざるものを其儘自分に貸與せられた、自分は餘りに其れは勿體ないと再三辭つたが、遂に借讀することになつた、氏が自分の慾を割いて迄後進の吾々を愛撫せられた事は、今に至る迄謝する言辭も無い、其れも五度三度二ヶ月三ヶ月なら誰でも出來るかは知れぬが、此新聞貸借は長い間一日も缺けたことなく、自分が三十九年新潟に轉出する迄繰返されたのである、事柄は新聞の貸借只其れだけで餘りに珍しくも無いが、大問題で無い